「カラスの勝手」にはさせない

カラスとのつきあい方

問い合わせ
ごみに関すること＝環境業務課管理係・℡内線2631
鳥獣の保護に関すること＝環境政策課みどりの係・℡内線2615

ハシブトガラス

むかし、中原町にこんぴらさんがあったころのおはなしです。並木の大クスのテッペンにカラスが住んでおりました。ある時、行者がやってきて「ナカミチ」の屋敷に宿をこい、泊まりこむようになりました。行者はぜんそくをわずらい、苦しんでおりました。その時、大クスに住むカラスが、こんぴらさんのことをおしえてくれました。そこでさっそく、こんぴらさんへいって願をかけましたところ、水をあび身をきよめるとよくなるとのお告げがあり、すぐ実行しましたところ行者のぜんそくは治りました。それから、行者はたいへんカラスをだいじにしましたので、行者の出かけるところへは、かならずあとからついて行くようになったということです。

「並木の大クスとカラス」川越の伝説（川越市教育委員会）より

人間に身近な鳥のカラスは……

●かつては、「賢い」「神聖な」イメージも

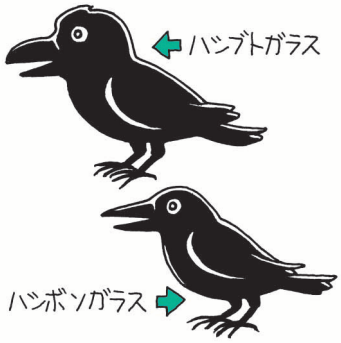
昔から、人間の身近な所にいたカラス。右の伝説の中に登場するカラスは賢くて、かわいらしい感じがします。また、古事記や日本書紀には神聖な鳥として登場し、日本サッカー協会のシンボルマークには、日本書紀に出てくる三本足のカラスがデザインされています。日本代表のユニフォームで、ご覧になった方も多いのでは？

●被害が、だんだん深刻に

しかし、真っ黒な姿などから、一般的にはあまりいい印象がありません。その上、最近では「ごみを荒らす」「襲われた」など、新たな悪評を耳にするようになりました。

平成十三年ごろから、東京の周辺に位置する県内の自治体では、カラスの被害が深刻になっています。平成十五年度に県内の被害を調査したところ、「ごみを荒らす」が千三十六件、「襲われた」は二百十件でした。その多くは、県南部で発生しています。昨年、市内では「襲われた」はゼロ。でも「ごみを荒らす」は、市民の皆さんから五十二件の連絡がありました。

そこで、カラスの生態と、被害を最小限にするための方法を調べてみました。



ハシブトガラスとハシボソガラスの見分け方と習性

種類	外見の比較	鳴き声	本来の生息地	食べ物の比較
ハシブトガラス	くちばしが太く、額が出っ張っている	「カア、カア」と澄んだ声が多い	森林など山間	木の実や肉が好き
ハシボソガラス	くちばしが細く、額はなだらかである	「ガア、ガア」と濁った声	草原など平地	農作物や昆虫が好き

＊ハシブトガラスの鳴き声は、威嚇する場合などには濁って聞こえることがあります。
＊このほか、鳴くときの姿勢などでも、見分けることができます。

ごみを荒らされないように

●身近なカラスは、ハシブトガラスとハシボソガラス

私たちの身近にいるカラスは、ほとんどがハシブトガラスとハシボソガラスです。両者とも色は真っ黒で、見かけはほとんどいっしょ。それぞれの見分け方と習性は、右ページの表のとおりです。おおむね、ハシボソガラスが農作物への被害をもたらします。そして、都市部で増え、問題となっているのはハシブトガラスです。

●都市で生ごみを餌に、爆発的に増加

ハシブトガラスは、繁殖期になると、つがい単位で縄張を持ち、その中に巣を作って子育てをします。繁殖期以外の期間には、若い個体といっしょに集団となり、夜明け前にねぐらを出て活動し、夕方になるとねぐらに戻って来ます。

宅地造成などにより山の木が伐採され、食料がなくなると、ハシブトガラスは住みやすい場所を求めて移動し、都市に住み着きました。

都市には、山にいたワシやタカなどの天敵がいません。また、張り巡らされた電線や電柱は、今まで住んでいた森林に似ていました。そして、生ごみという栄養価の高い餌が、大量にありました。そのため、老いても卵を産み続けることができるとともに、より多くのひなが成鳥になるまで生き延びることができるようになりました。本来、警戒心の強いハシブトガラスですが、生ごみをあさっていてもまったく気に留めずに通り過ぎてしまう人間を恐れなくなりました。

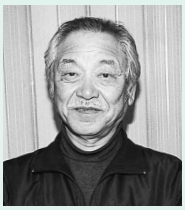
●捕獲では解決が困難

都市に適応したハシブトガラスは、爆発的に増えました。平成二年ごろから増え始めた東京都では、同十二年から捕獲などの対策を始めています。埼玉県でも、平成十三年からカラス対策検討会議を開催するなど本腰を入れるようになり、東京周辺の県内自治体では捕獲等を行っています。しかし、捕獲されるハシブトガラスは、若く飢えた個体がほとんど。経験豊かな、繁殖能力のある個体は捕まりません。そのため、個体数の減少にはあまり効果が上がっていない現状です。

●根本的には、ごみ対策

捕獲してハシブトガラスを減らしても、たくさんの餌があれば、また周辺から集まって来てしまいます。ハシブトガラスを減らすためには、餌となる生ごみを減らすことが

生態系全体のバランスが重要



㈶県生態系保護協会川越坂戸鶴ケ島支部長・笠原啓一（かさはらけいいち）さん（69歳・元町（もとまち）１丁目）

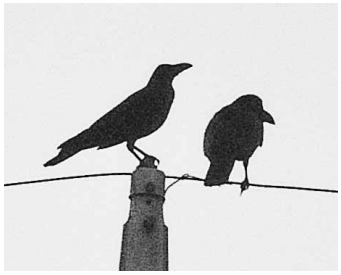
カラスは他の鳥のひなや卵を食べるため、カラスが増えると他の野鳥は数が少なくなります。市内にはオオタカが繁殖している場所があります。オオタカはカラスのひなを食べるため、カラスはひなを守ろうとしてオオタカを攻撃します。カラスは頭がよく、親のオオタカを１羽が誘い出している間に、他のカラスがオオタカのひなや卵をさらってしまいます。

動物の死がいを食べるカラスは本来、自然の中の掃除をしていました。そのため、カラスがまったくいなくなっても困ります。やはり、適正な数の維持が必要です。

生態系全体のバランスから見て、カラスは増えているようです。これはカラスに限ったことではありません。ムクドリ・ヒヨドリ・キジバトなど、人間と共生できる都市型鳥類と呼ばれる鳥に共通した傾向です。都市にあるビルを山の代わりに、電柱を木の代わりにして巣を作ります。餌となる生ごみが豊富にあるため、雑食性で群れになって生活している鳥にとって、都市は天国。どの鳥も個体数を急激に増やしています。

山の中にある、実のなる木を切ったために、そこに住んでいたクマなどの動物は、餌を求めて人里に下りて畑にある作物の味を覚え、常時畑を荒らすようになりました。また、かわいいからと餌付けをして、手から餌を食べるようになると、動物は人間を頼るようになります。このように接触することで、人間と動物の間でいろいろな摩擦が起こります。カラスも同じ。ピラミッド型をした生態系を崩さないために、人間がかかわることなく、動物が生活できる環境が理想です。

材料に針金も使われているカラスの巣



つがいと思われる、２羽のハシブトガラス

畑で餌を探す、ハシボソガラス

ごみ集積場に落ちている餌をあさるハシブトガラス